

指導方法の改善（第2学年3組 図画工作科）

報告者 島崎 智朗

これまで、①アカデミック・ライティング指導の計画と実践、②「言語能力」育成状況の多面的測定に関して、「読っ子学習」及び「国語科・社会科・算数科・理科」等を通して、アカデミック・ライティング指導における有効な手立てについて述べてきた。

本稿では、上記の教科等外における「図画工作科」の授業実践を通して、「アカデミック・ライティング指導の改善と実践」について述べていく。

1 題材名 楽しかった私の思い出（立体に表す）

2 第2学年における「発達の段階に応じた言語能力の到達度目標」

読解力の側面	創造的思考の側面	他者とのコミュニケーションの側面
身の回りにある事物を理解し、自分事として事物を捉え、正確に把握し ^⑧ 、自分なりの方法で表現することができる。	アイデアや概念を説明することができる ^⑨ 。 説明する・認識する・意識する	意図を何らかの手段で伝達しよう ^⑩ とすることができる（非言語手段） ^⑪ 。

本題材は、紙粘土を主材料にし、自分の楽しかった思い出を立体に表す題材である。無数にある思い出の中から図画工作科で表現するのに適した思い出を選択する（下線部⑦）ために、思考ツールのピラミッドチャートを用いる。活動中は、どのような形や色にしたら自分の思いが表現できるのかを児童が意識し、自分の表現のよさに気付くことができるように（下線部④）、タブレット端末を活用したデジタルポートフォリオの作成と、それを通じた支援を行う。また、自分の作品への思いを友達に語ったり、友達の作品への思いを聞いたりする（下線部⑨）ことができるように、児童同士の対話が自然と生まれるような学習環境の設定を行う。さらに、単元終末には鑑賞活動を設定することで、見方や感じ方が広がるようにする。

3 題材の目標と評価規準

(1) 題材の目標

楽しかった思い出を基に表したいことを考え、形や色を工夫して立体に表すことができる。

(2) 評価規準

ア 楽しかった思い出を紙粘土で表すときの感覚や行為を通して、形や色の感じなどに気付き、表したいことを基に形や色を工夫して表している。 【知・技】

イ 楽しかった思い出を基に、表したいことに合う形や色を選び、どのように表すかについて考えている。また、自分たちの作品から見方や感じ方を広げている。 【思・判・表】

ウ つくりだす喜びを味わい、楽しかった思い出を立体に表す活動に取り組もうとしている。 【主】

4 題材の指導計画（全5時間）

時	主な学習活動（○）	指導上の留意点（・）	評価規準（◆）【観点】
1	○ピラミッドチャートを使い、たくさん思い出の中から図工で表現したい思い出を選ぶ。 ○選んだ思い出を基に、どのような形や色で表現していきたいかイメージをもつ。	・思い出を選ぶ際に、①特に楽しかった思い出②形や色を工夫しやすい思い出といった視点を与える。	◆紙粘土からできる形や絵の具と組み合わせた時の色から、形や色の感じに気付いている。 【知・技】
2	○紙粘土を主材料に、空き箱の中に思い出を表現する。 ○タブレット端末を使い、「好きな形や色が見つかった」と思う表現をデジタルポートフォリオに記録する。	・児童が造形的な見方・考え方を働かせ、つくりだした意味や価値を自覚することができるように、児童の思いに共感したり、活動や表現を称賛したりする。	◆様々に表現を試しながら、進んで活動に取り組もうとしている。 【主】

3	○前時の活動を振り返り、表したいことを表現するために本時で工夫したい形や色を考える。	・事前に児童のデジタルポートフォリオに目を通しておくことで、一人一人の表現の変容を見取り、個に応じた支援ができるようにする。	◆表したいことを見付け、イメージに合う形や色を試しながら、どのように表すかについて考えている。 【思・判・表】
4	○紙粘土を主材料に、必要な材料を組み合わせながら箱の中に思い出の様子を表現する。	・同じような思いをもっている児童同士をつなぐことで、見方や感じ方が広がるようにする。	
5	○作品を通して自分の思いを語ったり、友達の思いを聞いたりする。	・自分の作品の人物や生き物が友達の作品に遊びに行く形で交流することで、鑑賞の活動に楽しく取り組み、自分の思いを語ったり、友達の思いを聞いたりすることができるようにする。	◆造形的な面白さや楽しさを、感じ取ったり考えたりし、見方や感じ方を広げている。 【思・判・表】

5 指導の実際と考察

(1) 読解力の側面

図画工作科「絵や立体に表す」において本題材のように自由度が高いテーマを設定する際、「何をすればいいのかわからない」「表したいものが決まらない」と活動に入ることができない児童が存在する場合がある。そのために教師は、児童が表現へのイメージをもち、進んで活動することができるような手立てをとる。例えば、「遠足で動物園に行った思い出をつくりましょう」というように、教師が事象を限定することも考えられるが、それでは児童の思いまで限定してしまうことになりかねない。児童自身が事象を選ぶ過程こそが大切であり、その思いが表現につながるものであると考える。

本題材では、読解力の側面にある「事物」を、児童一人一人がもつ「思い出」と捉える。過去の経験の中に漠然と存在する数多くの思い出を自分事として捉え、正確に把握するために、ピラミッドチャートを活用した。

図1の児童は、下段には6つの思い出を記述している。中段には「楽しかった思い出ベスト3」という選択の視点を与え、さらに、上段には「図工で形や色を工夫できそう」という造形的な視点を与えることで、図画工作科で表現するのに適した1つを選択できるようにした(図1)。活動に入ると、この児童に限らず、全ての児童が迷うことなく表現に取り組む姿が見られた。また、造形的な視点で事物を捉えたことで、造形的な見方・考え方を働かせながら表現することができていた。このように、自分事として事物を捉え、正確に把握する

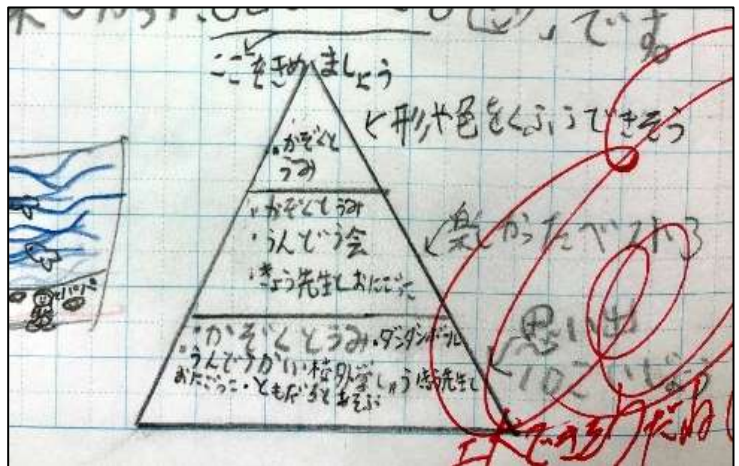






図1 児童が作成したピラミッドチャート

ことは、その後の表現につながる大切なステップであると考えられる。

題材の振り返りでピラミッドチャートについての記述がある児童にインタビューを行った(表1)。インタビューの回答からも、ピラミッドチャートが本題材において有効に働いたことがわかる。つまり、身の回りにある事物を自分事として事物を捉え、正確に把握することで、児童は自分の思いを生かして表現することができたということである。また、このような思考を様々な場面で活用することができると感じている児童がいる。

表1 ピラミッドチャートと作品、インタビューの回答

	ピラミッドチャート	作品 ※デジタルポートフォリオの写真	インタビューの回答
A 児			・何をつくるか迷っていたけれど、ピラミッドチャートで考えたら決めることができた。海をグラデーションで表現したかったから「海」を選んだ。
B 児			・すごくたくさんものから決める時に便利だった。富士山に登った時の気持ちを思い出すことができた。お楽しみ会の内容を決める時など、生活の中でも何かを決める時に使えると思う。

(2) 創造的思考の側面

本題材では、「アイデアや概念」を、主題、形や色、児童が抱く思いと捉える。そして、表したいことや実際に表した形や色を認識したり、なぜその形や色にしたのかを説明したりする思考を創造的思考であると考える。また、表したいことを形や色に置き換えることを「意識する」とする。国語科であれば文字に、算数科であれば数字や図形に置き換わるものであり、意識の対象は異なるが、その思考はどの教科においても共通するものがあると考えられる。

この時期の児童は、表したいものを大きく表現したり、楽しい気持ちを明るい色で表現したりと直感的に形や色に働きかけながら表現をしている。しかし、活動や表現が刻々と変化していくために、その時につくりだした形や色を認識できていないことが多い。どのような形や色にしたら自分の思いが表現できるのか、また、現時点においてそれが表現できているのかを認識することは、イメージする表現に近づいたり、自分の表現のよさを自覚したりすることにつながる。そこで、自分の視点から対象や事象を捉えることができるというタブレット端末のよさを生かしたデジタルポートフォリオの手立てにより、児童が対象や事象と向き合う場面を設定する。さらに本題材では、「創造的思考の側面」と「他者とのコミュニケーションの側面」を意識し、活動前に友達のデジタルポートフォリオを参考にしたり、活動中に友達の作品をデジタルポートフォリオに記録したりすることができるようにした。図2は、児童が作成したポートフォリオの内容である。このように、表現の途中で自分の作品を見つめることで、自分の表現が自分の思いに合っているのかを認識し、次の活動で形や色を意識することにつながる(図2)。

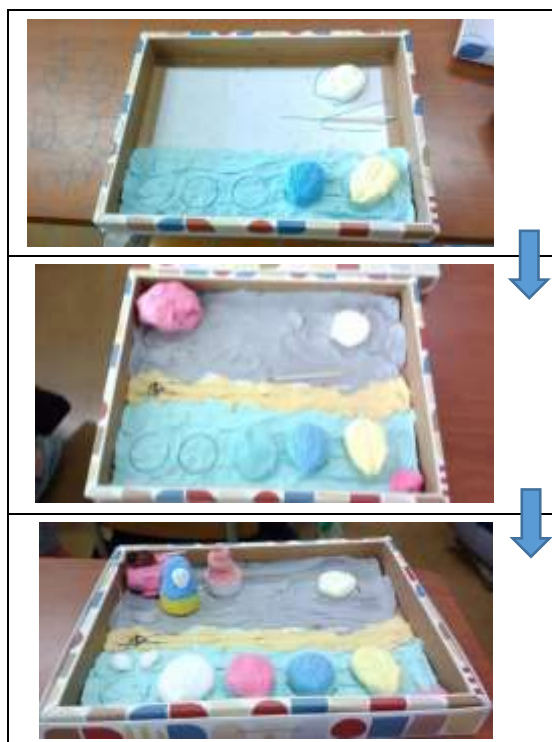


図2 デジタルポートフォリオに記録した作品の変容

また、表2は、前題材と本題材を比較し、デジタルポートフォリオに記録した写真の枚数が著しく増加した児童へのインタビューの結果である。「認識する」ことに関する回答が多いが、この時期の児童に

としては、認識することが説明したり意識したりすることの土台であり、この繰り返しが今後の学びにつながるものであると考える（表2）。

表2 デジタルポートフォリオ（図工アルバム）に関するインタビュー結果

- ・写真を撮るときには、自分が「うまくできたな」と思ったところを撮るようにしている【認識】。
- ・離れたり近づいたりして、好きなところを見つけて撮っている【認識】。
- ・工夫が思いつかない時に、前の図工アルバムを見直している【認識】。
- ・作品ができた後や、次の作品を作り始める前に自分の図工アルバムを見直したい【認識】。そして、次の作品に生かすことができる【意識】。
- ・友達の図工アルバムを見て、工夫を参考にしている【意識】。
- ・つくっている途中で友達の作品を記録して、自分の作品に生かすことができる【意識】。
- ・自分の作品のよさや工夫を友達に伝える時に使っている【説明】。

(3) 他者とのコミュニケーションの側面

「意図を何らかの手段で伝達しようとする」とは、全ての教科の学習や生活場面の中で必要なことである。言語でのコミュニケーションはもちろん、算数科では図や式を用いて自分の考えを友達に伝えている。図画工作科においても、作品を中心として他者と思いを伝え合うことで、児童は造形的な見方・考え方を働かせ、見方や感じ方を広げることができる。本単元では、児童のデジタルポートフォリオの内容やノートの記述を見取り、同じような思い出を表現している児童や、同じような工夫をしようとしている児童をつなぐことで、対話が自然と生まれるような場面を設定した。また、終末の鑑賞の活動においても、児童が対



図3 思いを伝え合う児童の様子

話を楽しむことができるような手立てを取り、遊びの中で他者とのコミュニケーションができるような環境を設定した。児童は、自分がつくった人物や生き物と一緒に友達の作品のもとに向かい、作品のよさや自分の思いを伝え合うことができていた（図3）。また、表3は、題材終了後の振り返りに、友達とのコミュニケーションについて記述した児童へのインタビューの結果である。図画工作科では、一人一人に思いや表現が異なることから、自分の思いを自由に表出したり、様々な他者の思いを聞いたりすることができ、より実感を伴ったコミュニケーションができると考える（表3）。

表3 友達とのコミュニケーションに関するインタビュー結果

- ・つくっている時に、友達から「すごいね」と言われるから嬉しい。
- ・友達と一緒に活動すると、友達の工夫がたくさん聞けるし、友達にも自分の作品の工夫した所をいろいろ伝えることができる。
- ・アイデアが思い浮かばなかったときに、友達の図工アルバムの写真を見て、その友達がアイデアを教えてくれたからよくできた。
- ・友達と一緒につくった方が、こうしたらよくなるってわかるから工夫ができる。

6 まとめ

本題材では、言語能力の到達度目標に沿って指導方法を改善した。これにより得られた成果及び課題として、以下の2点に着目する。

- (1) 図画工作科のような非言語能力が表れやすい学習において、到達度目標に応じた手立てを講じることで、造形的な見方・考え方を働かせ、互いの思いをアカデミック・ライティングに沿って伝え合う姿が見られた。
- (2) 今後も教科横断的な視点で取り組んでいく事で、各教科の本質と相乗的に言語能力を育成することができると思われる。